

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	矢島明希子
<p>主 論 文 題 名 :</p> <p>中国古代の動物観をめぐる研究—鳥のイメージから見る古代の環境と心性</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>中国古代の人々の日常生活の範囲にいる鳥たちに着目し、人々がその鳥に対して抱くイメージがどのように形成・伝達され、変化していったのかという問題を検討することによって、古代中国の人々の自然との関係や心性を探る。</p> <p>第1章 中国古代における悪鳥観</p> <p>まず、悪鳥のイメージを持つ鳥について検討する。文献資料上、悪鳥として名高いのはふくろう（鴞・鸛鴞・梟・鵂）である。ふくろうを悪とする記述には、「悪声」という評価が多く、声によって悪鳥のイメージが発生したものと考えられる。ただし、図像資料からは、明確な悪鳥のイメージは看取できず、ふくろうが明確にマイナスに傾くのは戦国以降である。ふくろうの悪鳥化は、知識伝達の変化という社会的状況と一致している。春秋時代後期以降、声の持つ力よりも文字による知識伝達の優位性が高まると、それまで尊崇と畏怖の対象であった神秘的存在は否定されていった。鬼神など、正負両義的な意味を持つ神秘的存在に関する知識は、巫など一部の職能者が占有していたが、文字の普及と共に、広く知識人の間にも拡大していく。それに伴って、このような知識は、整理・体系化されていったものと考えられる。ふくろうのイメージも、戦国時代以降、修辞法として鳳凰と対比関係に置かれ、鳳凰とふくろうとは正負の象徴的存在として二極化する。</p> <p>さらに、歴史的な気候変動や、戦国期から急速に山林藪沢が切り開かれたことで、都市に住む知識人にとって、山林藪沢はそれ以前に有していた聖性を失っていった。このような時代的な差だけでなく、地域的な差も看取できる。華南の森林豊かな地域では、ふくろうの鳴き声が、恐ろしい声とはとらえられていないことから、ふくろうに対するイメージには環境による地域差があったことが分かる。これら自然環境と人間との関係が変化も、ふくろうの神秘性が失われた一因と考えられる。</p> <p>第2章 漢代画像石に見るふくろうの表象</p> <p>文献資料上は悪鳥とされたふくろうが、図像資料ではどのように表現されていたのかを示す。殷代青銅器にあらわれるふくろうは、祭祀に関与し、神意を伝える仲介者的存在であったと考え</p>			

られる。この段階では、正負両義的な存在として生者と神（祖霊）とを仲介し、時にその目の力から凶を跳ね返す辟邪の効果が期待された。

漢代の画像石におけるふくろうは、他の鳥たちとともに楼閣上に描かれるものと、一對の鳳凰の頭上に押し戴かれる構図の2パターンある。前者は楼閣の中で子孫が祖先（死者）に礼拝する図であり、祖先に対する孝行を示すものと考えられる。後者は墓室の後室後壁に配置された図であり、ここにはしばしば昇仙図が配置される。これらのことを踏まえると、どちらも悪鳥のシンボルとは考えがたい。鳳凰などとともに冥界において死者を警護し導く役割を与えられ、季節祭における梟羹の分賜など、仲介者としての役割をとどめているが、主に死者との関係の中でその威力が機能している。

また、ふくろうが描かれた画像石には、地域的な偏りがある。これらふくろうの画像石は、狩猟を重視した殷の故地に集中しており、気候変動や開墾によって森林が切り開かれていった戦国時代以降も、ふくろうの生息地である森林が比較的残されていた地域である。また、漢代には墓地に樹木が植えられ、墓地林を形成していた。聖なる存在であった祖先も、漢代には恐ろしい存在とみなされていることから、ふくろうのイメージの変化には自然環境の変化と、死霊が住む場所へのイメージの変化が影響していると考えられる。

### 第3章 中国古代の鴟夷

ふくろうのイメージがどのように機能していたのかについて考察する。春秋末期、呉の重臣である伍子胥は、呉王の夫差の怒りを買って自殺させられた後、遺体を鴟夷という皮袋に入れられて江に流された。鴟夷とは一体何か。『国語』呉語では、「鴟鵂」と表記され、鳥の性質を強く帯びたものであったことがうかがえる。

鴟夷が登場する場面を検討すると、まず、射天は、季節の循環を促す季節祭と見ることができる。管仲、伍子胥、鴟夷子皮の事例からは、国境や江という空間的境界を移動するだけでなく、管仲は罪人から宰相へ、伍子胥は死者あるいは濤神へ、范蠡は重臣から大富豪へという身分的転換が起こり、鴟夷を通過することで賢臣、さらには神格化されている。鴟夷が鳥の名を持ち、かつ獣皮であることを踏まえると、鴟夷は供犠における犠牲獣と同一の役割を果たしており、それを射たり水に流したりすることで汚れを祓う目的に用いられたと考えられるのである。

鴟夷は、獣皮の袋そのものが空間や身分を転換させる媒介装置として機能しているのに加え、「鴟」はふくろうのことであることから、前章で見た媒介としてのふくろうの性質が、この鴟夷にも関係しているのではないかと考えられる。また、鴟夷に関する記述は東方地域に偏向しており、前章で述べたふくろう文化の偏向と一致するため、ふくろう文化の地域性を補強することができよう。

#### 第4章 中国古代における鳩の表象

ふくろうから離れ、季節の移り変わりと密接に結びついた鳥のイメージについて検討する。

月令類や『詩』において、鳩は女性・採桑・婚姻のイメージが色濃く、男女交合や繁殖など性的なイメージを想起させるものであった。

また鳩は、漢代ころから老人を支える杖の先端に飾られ（鳩杖）、養老の標識となっており、鳩杖には養老のイメージが広く定着した。鳩杖について、後漢の高誘は、陰気が盛んになりはじめる秋に老人の気が衰えるのを防ぐものと解釈している。当時の養生観から、病気は陰陽の気が偏向・過剰になりバランスが損なわれることに起因すると考えられていた。銀雀山漢簡「曹氏陰陽」の陰陽分類に従えば、老人も秋も陰の属性に分類され、陰が過剰になっている状態ということができよう。そこに、陽鳥でもって老人の気を補おうというのである。『詩』における婚姻・生殖のイメージは、生命力をもたらすものともいえ、あながち養生とかけ離れたものではないだろう。

さらに、また、鳩は春と秋に鷹と交互に変化するものと考えられていた。このような循環関係の背景には、季節を陰陽の気の循環と考える思想と、猛禽と非猛禽を陰陽に区別する分類法があったと考えられる。この分類によれば、鳩は確かに春の陽鳥に区分できる。鄭玄は、気を一新し季節を循環させるものとして、鳩と春鳥を挙げており、鷹と交替する「鳩」とは、ハト以外に、倉庚や戴勝など同じような性質を持った春の鳥たちを内包していた可能性がある。これは、季節毎に現れる鳥たちを季節の循環の枠組みで捉え、引いては陰陽の気の循環と補充を基本とする中国の宇宙観の中に動物を位置づける分類概念の存在を示している。

#### 第5章 中国古代における鳥の声と社会

同じ春の鳥でも、鳩が陰陽循環の中に位置づけられたのに対し、倉庚は春を告げる鳴き声が注目されたようだ。この章では、季節を告げる鳥の鳴き声の記述から、中国古代社会における鳥の声について検討する。これは、自然界の音環境を考えるに当たって、サウンドスケープという概念を中国古代社会にも適応できないかという試みでもある。

鳥の鳴き声の中にメッセージを聞き取る文化は、中国古代にも根強くあるが、その性格は二つに分けられる。

まずは、倉庚に代表される候鳥の声である。これは月令・歳時記・農書など実用書に記録され、継承されていることからわかるように、一年のサイクルが正常であることを示す「時の音」といえる。もうひとつは史書や故事・伝承などに記録された予言など非日常的な音、異常事態を知らせる音である。後者の鳥の声は次第に人間的に記述され、その声を解釈する仲介者を必要としなくなる傾向にある。これは、前節で述べたように、戦国以降の人間中心社会への移行と、

鳥獸の声を理解する専門知識がより広い知識階層へ普及していくことと連動しているだろう。

一方、倉庚のような「時の音」は、より開かれた知識だったと推測されるが、知識の体系化の流れと無関係だったわけではない。それは、『礼記』や『呂氏春秋』などの月令類がこぞって倉庚を春の候鳥としていることに示されている。季節の到来は地域や時代によって異なるため、地域・時代毎に固有の候鳥があったはずで、現に、魏晋以降の地志や紀聞には個別の候鳥が記録されている。『礼記』や『呂氏春秋』の月令記事は、『詩』豳風・七月や『夏小正』などの諸篇を取り入れて整理されたものだと考えられており、このような経緯の中で、先秦時代、各地域に固有の候鳥は記録に残らなかった可能性があるだろう。また、同じ春鳥である鳩との違いについても、『礼記』などに「倉庚鳴、鷹化爲鳩」という記録が固定化されたことで、陰陽の変化と関係して老人の気力を補う鳥とされた鳩と、「時の声」である倉庚のイメージを分けたのではないだろうか。戦国以降の知識の統合・体系化の影響は、このような自然や生態の記録の中にもうかがい知ることができる。

以上5章にわたって検討したように、特定の動物に対するイメージは必ずしも一貫したものではない。イメージの変化に影響を与える要因として、筆者は本論全体を通じて①学問的背景（情報伝達のあり方）と②自然環境という、大きく二つの要因を提示した。

### （1）学問的背景

文字伝達の普及によって自然に関する知識が整理され、そのイメージが固定化されることは、第1章及び第4章・第5章で述べた。また、経典を極めて重要視し、権威的な注釈家の説をたどることに注力した中国伝統学問の中では、一度固定化されたもののイメージが大きく変わることはなかったと考えられる。

また、本研究を通して、古典文献上の鳥名と現在の鳥名と同定するには、分類原理の違いという大きな問題がある。中国の文献上のある鳥名について、いくつかの文献を付き合わせて検討すると、積み重なった注釈によって、複数の鳥名が混同されていることはほぼ全ての章で言及したところである。これは、中国の学問が自分の目で観察し記述するよりも、名前によってものを理解しようとしてきたことに大きな要因がある。中国古代の動物界には複数の分類基準が併存している。音韻や文字による言語学的分類や、利用法・効能による本草学的分類があり、その他にも、第4章で挙げた銀雀山漢簡の「曹氏陰陽」には、人を傷つけるかどうか、角の有無、住処、季節の渡りをするかどうかなど、動物の生態によって陰陽に区別する分類原理があった。また、物候は、季節による分類である。

このように、複数の分類基準を複合的に用い、変化を容認する枠組みこそ、中国の動物観の特徴といえる。

## (2) 自然環境

第1章で引いた唐・劉恂『嶺表録異』でも、北方と南方ではふくろうに対する接し方がまったく異なることが記録されている。ここから、乾燥化していく北方と豊かな森林を保つ南方という自然環境の違い、つまり動物に親しむ環境にあるかどうかということが、そのイメージに大きく関わっていることがわかる。

古代の気候変動や開墾による森林の減少など、自然環境の変化については第1章・第2章で述べた。戦国時代以降、華北では森林が耕地に変わり、多くの天然林が失われたと考えられている。鳥類は、動物の中でも特に環境変化に敏感な動物類群であり、森林や沼沢の減少によって住処を失うだけでなく、気候変動によって渡り鳥の越冬地やルートが変わるとされている。その中であって、狩猟と祭祀が強く結びついた殷の文化を引き継いだ地域は、中国有数の沢地を有しており、ふくろうに親しむ森林の文化が比較的長く保存されたと考えられる。

自然との距離感は、先に述べた伝統学問の特徴とも関係しているだろう。文字情報の記録・伝達を担う知識人と自然との関係について、第2章で述べたように、荘園領主ものある知識人は、都市在住の不在領主が少なくなかったとされ、こうした人々は、おそらく日常生活の中でふくろうに接する機会も多くなかっただろう。ふくろうについてよく観察する機会がなければ、文字媒体の情報をそのまま無批判に受け入れてしまう可能性は大いにありうる。

最後に、第5章で触れたサウンドスケープ論にもう一度言及したい。サウンドスケープとは、自然や人間社会の中にあるあらゆる音全体を風景として捉え、人間との相互作用を歴史的・文化的に追究しようとするものである。中国古代の資料からも、古代の音の風景の一端を垣間見ることができる。ふくろうの声に対する嫌悪感や、季節を告げる鳥の声がそれである。このような鳥の声は、中国古代のサウンドスケープを構成する一要素であるだけでなく、古代の人々の感覚世界を探る手掛かりになるだろう。また、視覚や聴覚などの感性は人々が生きている空間によって変化するとされ、同じ文化の中でも時代によって変わる。諸資料に記されたふくろうの声に対する好悪感の違いは、まさにこのような感性の歴史として捉えることができよう。

さらに、候鳥の記述からは、桑摘みの風景の中には鳩や倉庚など春の鳥たちが歌い交わっていたことが想像され、古代の人々がどのような音環境の中で生活していたのかをうかがうことができる。

中国古代史研究において、自然の音・聴覚に関する研究は多くない。それは、自然の音やそれをどのように知覚していたのかという具体的な記述が乏しいためである。それには、先に再三述べてきたような中国の文字重視の学問や、情報が整理される中で地域や時代ごとの独自の記録が失われていったことが大きく影響しているだろう。従って、本論では、経典文献の本文よりも鄭玄や高誘、郭璞ら漢魏の注釈に拠ったところが大きい。

資料的困難はあるが、古代中国における動物のイメージを探ることで、古代の人々が周辺の自然環境をどのように知覚していたかという、人々の心性に迫る風景の一部を示すことができたと考えている。

## Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	<input type="checkbox"/> "KOU" <input type="checkbox"/> "OTSU" No.                      *Office use only	Name:	Akiko Yajima
Title of Thesis: Views of Animals in Ancient China – Environments and Attitudes of Antiquity Visible in Bird Imagery			
Summary of Thesis: <p>This research considers how the ancient Chinese conceptualized their relationship with their environment and related attitudes through a discussion of the formation and transmission of imagery of birds.</p> <p>Chapters 1-3 – Owl Imagery</p> <p>The owl was notorious in ancient texts as a bird of ill omen, with much of the literature disparaging its call in particular. The fact that owls mostly hoot in the dark of night is likely responsible for this negative image. Originally, however, the owl was considered an intermediary that connected humans with the gods, and worshiped for its mystical existence having both positive and negative connotations. For example, primeval images are visible on <i>chī yí</i> (鷓夷), large leather bags in which sinners were carried, and it was sometimes customary in the eastern regions of China for participants in summer solstice rituals to drink a soup made from owls sacrificed during the ceremony. Lore surrounding mystical existence, like the owl used to be transmitted orally by experts such as <i>wú</i> (巫: a kind of shaman). From the Chunqiu era, however, intellectuals began to document and spread this information and, in the process of organizing and systematizing this knowledge, robbed the animal of its mystique and codified it as evil.</p> <p>Negative imagery is absent, however, from carvings/engravings and bronzeware in ancient China. Stone reliefs of the Han period portray scenes of owls carrying the souls of the departed to heaven. Most have been excavated in Eastern China, in part because forested area, the owl's natural habitat, was preserved there even as it rapidly declined nationwide from the Warring States Period. Forested cemeteries could have led townspeople to link the owls that lived there with the ghosts of the departed in the tombs. An additional factor is the relocation of intellectuals responsible for knowledge transmission to large cities, away from the natural environment.</p> <p>Chapters 4-5 – On Birds of the Spring</p> <p>In <i>Shī Jīng</i> (詩經) and monthly ordinances, doves were a symbol of femininity and marriage because of their appearance in the spring, when women picked mulberry leaves. In addition, the elderly decorated their canes with ornaments of doves, symbolizing good cheer to ward off the decline of old age. These images show that seasonal birds were classified according to the principle of <i>yin</i> and <i>yang</i>. Another seasonal bird was the <i>cāng gēng</i> (倉庚: oriole), whose call was believed to herald the coming of spring, suggesting that birds' cries were sometimes perceived by the ancient Chinese as meaningful words. Descriptions of how such sounds from the natural world were conceptualized help reveal to us the soundscape of antiquity.</p>			

## Thesis Abstract

No. 2

That being said, the specific birds that heralded the seasons likely depended on historical era and region, but intellectuals' emphasis on codified imagery in religious scriptures means that some have been lost to history.